

第110回東洋文化講座 11/29(水)18:00~20:00 共催:(公社)中央日韓協会

1920年代における朝鮮総督斎藤実の統治政策と世論

張 信 氏 (韓国学中央研究院人文学部・助教授)

斎藤実(さいとう じつ)は朝鮮総督の就任中に「文化政治」を推し進めたことから、前任者の寺内正毅が行った「武断政治」とよく比較される。元を辿れば、彼は三・一運動の直後に赴任したため、朝鮮人の民心や世論の動向を常に意識せざるを得なかった。統治の安定化を図るために推進した朝鮮人新聞や制限的な出版、結社と集会の許可などはその産物であり、その評価をめぐる当時朝鮮人の間でも賛否が分かれていた。本講演では、三・一運動(1919)や六・一〇万歳運動(1926)、光州学生運動(1929)を通じ、斎藤総督のいわゆる「文化政治」を新たな視点から紹介する。

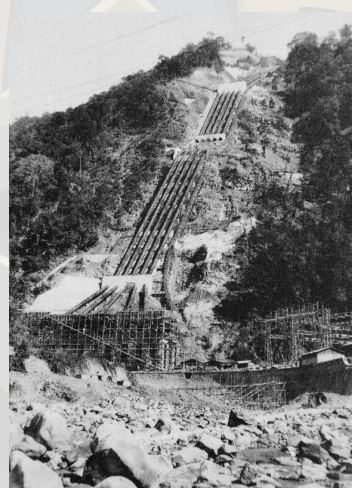


第111回東洋文化講座 12/8(金)18:00~20:00

ダムから考える植民地台湾 —嘉南大圳事業と台湾人エリートのかかわり—

清水 美里 氏 (名桜大学国際学部・准教授)

嘉南大圳(かなんたいしゅう)事業は、台湾の日本植民地期に建設された巨大な用水路である。嘉南大圳は、日本でも台湾でも八田(はった)与一(よいち)という日本人が建設に携わったことに注目が集まってきた。しかし当時の資料を読み込んでいくと、台湾人の若きエリートたちが嘉南大圳事業で生じた様々な困難の解決のために尽力していたことが分かった。本講演では植民地という環境下における台湾人エリートの奮闘について紹介する。



第112回東洋文化講座 12/15(金)18:00~20:00

香港:未完の脱植民地化 —国民統合か、民主化か—

倉田 徹 氏 (立教大学法学部・教授)

香港は帝国の支配下で目覚ましい工業化・経済成長を遂げ、20世紀末まで植民地として存続した。しかし、植民地状態からの脱却という課題は、むしろ1997年の「祖国復帰」による植民地状態の終結後において尖鋭な政治問題となり、2010年代には世界を震撼させる大規模な民主化運動を呼んだ。中国政府と香港市民の双方が考える「脱植民地化」とは何かを、国民統合と民主化というキーワードを中心に考える。



開催形式

ハイフレックス型
にて開催



入場無料・事前登録制

監修: 安部 清哉 (東洋文化研究所長)

司会: 莊 卓 燐 (東洋文化研究所助教)

蔣 允 杰 (東洋文化研究所助教)

学習院大学東洋文化研究所

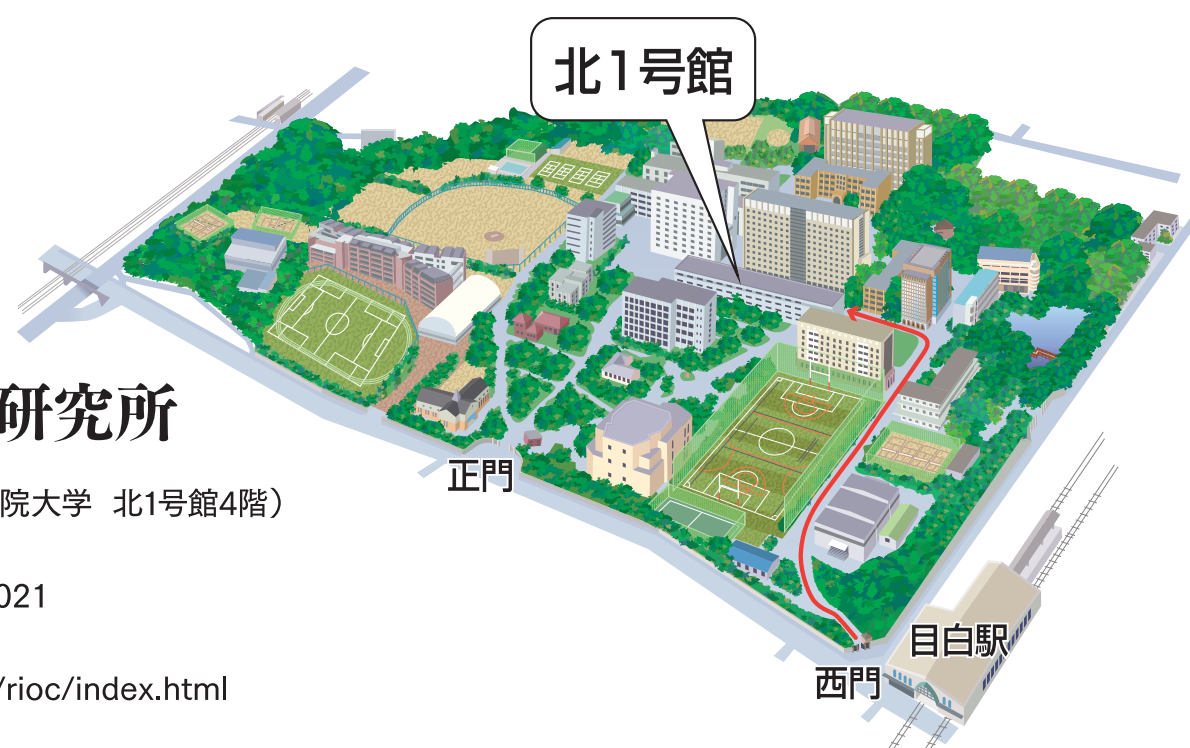
〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1(学習院大学 北1号館4階)

■JR山手線目白駅 徒歩1分

TEL:03-5992-1015 FAX:03-5992-1021

E-mail:ori-off@gakushuin.ac.jp

URL: <http://www.gakushuin.ac.jp/univ/rioc/index.html>



植民地の人からみる帝国

2023年度

学習院大学東洋文化研究所

東洋文化講座